特別
14
2090
4 (2)

北人て概を少拓足行定

を

もと

と、三

文筆やう

記ない

と、

と、羅家の辻み馬の頭かゞ見える。近寄つて、物好け
い見物をして、遠距離まで別出した所は、帰
路の悪い、世みも不安な叫び声を立てたが
やがて見えて、而も高陽は同えず、[illegible]
ハツタリ倒れると、其上を碧時人だからがもち
ろと拉めて、縛られて河えぬ内で行やう逝く
と、ポンと一発銃声が聞えて、又一発は跡から
もふく撃く。今まで[illegible]一時間の出来事の上み腸
を抜けて[illegible]ことは出来ず行て
宮もゆれ、地もゆれ、遠巡者と思ふの行く如く
行く[illegible]列位も驚くやうな見える。
拉らさむとする勇気は内み微つて、眼み映つて
も[illegible]立く[illegible]不[illegible]でもつがし眼前
を過行く人の乳は絶えずして、而も過行く歌の
[illegible]何者ぞかぶふふい。一時百余の此石を建し
てゐるを第一人でもつるが、今を[illegible]周囲の衣色の
人々は地を伏して命ゆるいから、
死んでゐるかも知れぬ。或者は[illegible]して、過行く者

を、気味わるくやうな面して祝てゐる。或者は鏡を
拵へてゐるから、ちつとらしいから、或者は九保み近い
姿で、肌は種坊染めのんうも厭らしい
色合である。逆やうな沈やう素肌の姿を上み
ゆけて出てゐるある。さてあるに精こめ、熱ヒ九み熱と
伸せて平気でゐる所とりは、仰向みこまるの白き
を見れは　のやうでもあれ　紫の色を生人
所もなく、死人でもあれ　のそれのあく赤い。唯煙剤の用をんやうな
ます
ヒ芙蓉味
けとの人てない
生きてゐるのでないことを知れる。人を共例とも
さく思ふこと、思し力ゐるかつこから、共例でふらし
しなから、ふらくと到底の作と陽炉みく
後く人の列と見てゐる。
今みの日は赤みの強りさこが、平気で
それみ死ゐるを行くせみると。死び苦をとゐてゐる
やうで、死とりのは　お冥土なるを命て
幻の街道の
のやうな思をれと。

を、気味わるくやうな面して祝てゐる。或者は鏡を
拵へてゐるから、ちつとらしいから、或者は九保み近い
姿で、肌は種坊染めのんうも厭らしい
色合である。逆やうな沈やう素肌の姿を上み
ゆけて出てゐるある。さてあるに精こめ、熱ヒ九み熱と
伸せて平気でゐる所とりは、仰向みこまるの白き
を見れは　のやうでもあれ　紫の色を生人
所もなく、死人でもあれ　のそれのあく赤い。唯煙剤の用をんやうな
ます
ヒ芙蓉味
けとの人てない
生きてゐるのでないことを知れる。人を共例とも
さく思ふこと、思し力ゐるかつこから、共例でふらし
しなから、ふらくと到底の作と陽炉みく
後く人の列と見てゐる。
今みの日は赤みの強りさこが、平気で
それみ死ゐるを行くせみると。死び苦をとゐてゐる
やうで、死とりのは　お冥土なるを命て
幻の街道の
のやうな思をれと。

（大の長う連）

と、見ると、連れの二人の弟と就れて、彦四郎は拾手
中一方に立ち、一人の男は、其の傍に、立ちて、
地に倒れ、やがて又、其の方を、遠く、来さのとんぼ
は、其の傍ひもをかけ、でなく、千代井は、其の紙
ふらくとふる、ふらふらのを、
れしく、みかりかりすと、
行くから、それから、際から、
を押して、来るので、腕を絞から、腕を、
きかゆるか、後ぶとして、
「行ぐど？」
「行ぐ」
と、彦四を掛けると、ピタリと止まること。彦四の掛けを
行くてみると、のかと思もれる。
の、襟は、ふし、
は、ぶかれて、実とってる。
はおってるばかりで。ツボンも一つ、でなへられて郎が
てるむかりで、ぎひのかれ月から月が、
手も、ぶらぶらする。
やっと、力をこめて、
一つみ、言せる、立ぐ、

「吉松が行くのかい、」と、誰
と言うこゑが、立ってゐる。男達
「ろくな事あらで、坐って居なのを見てゐる。
そこで僕は、(立ちこめる紙くずの中を)起きて、よろ
しながら、その眼中を覗いたと、一基の墓碑
りゐまし巡査と犯人とは抜かれて、みる。
風きまってゐる、これのさ眼一杯に抜かれて、みる。
こんな尽きる広い空なる空かい、
のやうに見えさう。
を見ることであらう。
或はこれの眼もとの海
も知れぬ、一でゐい、それ
知れぬ、オレンじを隠
時をも矢張り上、矢の巡査以上のものらない
てみこ。
「彼方へ行け、彼方へ」と一生懸命で、僕
は怒ってゐる。
すると、彼はもう言葉を使ってゐるやうな、ぱっちり
僕の立ってゐる所へ来つ。
僕は大きなグラリとして、物と言ん

大きな
はぬ
から、
行って
みる、
その
僕は
やっぱ
ぐ元ん
やうな
欲
死
気
立
弱
破
を
腕
相
が
僕

大きな柳が倒れて、僕と年倒れが倒れる。わるくしかはぬ穴が倒れて思られて、僕と年倒れが倒れる。わるくしかから、堅付けられて足をかけられて、引きずられて、出さうとしてー行く所へ〜〜〜〜ぬが、人の居ぬ方へ、日のカンカン照付けてゐる、淋しい、ものすごい、さうして、逃げ出さうとすると、芋の左右くはの方へ逃げ出さうとすると、芋の山の上で、ドシと一発鳴る、僕は反射的のやうに後退ってしまった。

やりまトンしくと二度鳴る。と、行意か芋の上を砲弾が飛んで行く。多人の芋で、淋しさうに、鳴き、叫び、鳴る

やうに鳴る。

欲を辺迴しこと！

死みさうな暑さか、立ち止ると、殺されさうと思ふ。

気が判れる、思ふ所が歩み泛ぶ、急気せきゆて、

立ちつ、列伍み紙と、繃帯されて高く半分、

鄭全て、単独中隊の前と時、晴れやかな、淋しさ、ひえ、

殺られて、苦く前、みみ、孤立、孤独に

ク闘えるとい、考ふ。日は邪魔

、勝敗して、捕虜まるーと、又禁止使ひが

絶てとみやうな暑と、立て、立を載て破裂後

が死。

僕は流伍に迫ってこ。

別れ

、、皆敢死した。第八砲列も共通り。然れども十二砲列では
三日目の夕刻まで無事で生存してゐるのは、僅と砲三門
と一隊だけは皆壊されてゐたのでーそれも僅か今人となる
故之人ーといふのが我ら僕だ。もう十二時頃も一時
も過ぎまい、何も作れない。手負を担ぎ出す時間
中は三五名程ばかりで、
ヤタレの中さ呼ぶ
狂氣は中に人もあり心と
味方と別れて、人のめくるを待
待つ。死ぬことは勿論
つて立働らき、物を言ひ笑ひまでするが、それでみて
死人である。一連一連は確実に敏捷で、弾丸を明暗
もくれは、部下の共通りキチンと行
そゆくが、それでみて不意に誰かと捉まえて、お前も
行者と問うこと、恐らく落膽しと知ては行と
言て笑へとものうるまい。
うから近付すやうるとそれも行るとも、恐
後悔えるのも、やり切つとすでしてこそ

みつつきまのやうに罵られるものさが、十夜芸術な極みだ。
その寂しい彼等の歌か文だ花を綻と視て、或は作併に一年を任せて、
る。それも各々詩を珍重して、某書解らずとも解きよさ
れる。彼が何そのやうにみられる。気のはかな
書を夜になる、まだ秋くも魔の姿と月の中へ入れ如何にかう
三つ四つ集まって来たらうと怪しむ暇さへなく、又色がカン
く照り出す。偶し何かの陣地へ来さ不可思議
始て戦闘も三日目と分るが、それも傍から直く忘れて
しまふ。何やら旅も終りに暮れぬも知れぬ、明けかしない
並べてこの一日で、真面目な時もあれば、眠い時もある
が、眠くても、暗くても、
戦法メッチャクチャで、芸術も論じない。而して誰一人
死を畏れる者もない、一体気ぬとはめ
なるまじく、ふつてる者は一人もないかぞ。
三日目とつきり、四日目とつきり、判然せぬが、一寸胸壁 breast work
の蔭で揉みやうて、眼を閉ぢると、俄の染のお
す。不思議な物が見える。それは浅葱 blue の壁紙の張り
で、まだ僕の杜めさい卓の上に、十 壊を載せ

つぶやしみ泣いてゐる。陳腐なのは、見えもせぬが、書
き悔かゝるよう。たゞ此部屋の上の方に青い空と
窓とこンぷう壁とが、何の品か、夜中の
よびおい。でゝ
えらかゝ、僕は永いこと心がかゝみピタリと独りぼっちの自分の姿
のちらつくのを見て、壁紙と眺めしてゐる。
寝ころがるまゝ、行燈は寝ぼけのごとくうとうとと思ひ。
さて壁紙と眺めゝを、special（kanetsuki 蔓か）や、絵えりまき
花や、格子のようなものや、何のようなものや——まゝ、我
知らずかうも絶くなってみやうとは思はなかつた。
時と共にうとうとと眠りの事は事実の入れ違ひの室と
信じ、2時を閉ちる。但し、燈や、燈と
光り揺ゆと眺めて、心の中で、かゝる夜ゞ、寝ぼけ
に、行燈は寂なるのごとくうとうと寝る。一夜過ぎで
紙のような夜しとことうとうとうとうとうと、芸術作品（作してゞ）と僕の
生が郷愁つし。と、訳ごうちゝ
言ふまゝ、かゝと大なゆでゆんだ。訳こうなれと
なと思ふこゝ、僕は泣いうさせめで、あからめさせ陰
の理解
そか
無言
母中で
と。こ
詳しく
侍ゝ
飲りて
後ゝ
もと
此時
回で
ひそ
しる
純
して
流を
ゝこゝ

の理由を聞いてみる。

それから立上って、彼方此方とながめて、指さしながら、無言の面と、敵を視て、敵を向けて、しきりに何の中では矢張り、何故怪ないのだらと思ってみる。一度伸持に対して、苦笑ひを向けながら、長いこと詳しく何か説明して、二人で無言で合ってゐる。

伸持を笑つて、太郎の面をながめると、右の肩をピクリ動かして、りうの眼で彼の方をとしてみるが、彼は敵からの変の変れうりえしだけで、黄みを帯びた

もえをもつて

此時から何らかつてこぶ、ふらふら中陰軽く。夫後

回で降るやうな雨で、不の、話うん〜水の迎潮

たこ雨とうるさ

ぽつぽつと

びちゃびちゃが、降る水高で、海らずの明る時出

しらで、敵が後と失て、逃れても大変と、

絶を知りもかして、時数を世中止して、敵が何かなどらか

して、何なでも捜さず、完全の出出だ。見こと

敵をしてみると伸持も敵の本の下へ隠りじもて信こまって

みるが、芸孫せみとして、陸員さうと思へば、

さられるかも知れない。

行かうと思ふ。

太郎と花子は行くのだ。

てか我が家の眼と鼻さきに拡がる、後は陳腐と拙劣つて

行き詰まつた。外出であつた、洋傘てもない、

外出をしてあつたら。――行やう探しに歩く。と、雨降の薄

さ、ぱらぱらと降り出した。雨も降りつゝ、その降り方が後地

か微みぬみ寂しさを。樹蔭が一つ眼れみ

ずとおもつて、パラと出て、み家とする。

降りぬかすので、此降る花

雨の石炭や花を降る雨降れる。この家和

なかなか書きにくい、行かれ、行かれ、

降る雨、迷寂さに、辺みどろの、ひらつけいる

も降くる花れこやうで、雨の降れと炭

とられば、外に懐しく、

ない、部屋でかふい、行

かしいものが接ちれる。が、遠立で、降こつて高

くドンと第一発の鳴る、降

るるるるるるるる。

ら注少す。此ピストル不意でありしが 此陽の花

チラ此かと吹り知むす。花が鳴る、その次の鳴る――

て、野

雨の霧

ケツリ

見えま

ミヤ

の屋

たい、

は行

支へて

とり

してる

矢の

る。如

ちひる

花が

とり

陽小屋か

此陽の花

は木

して、或く掻かれく脳の文線の両股に鎖されて居る。張りつ
も雨の露つことも気が紛れもするが、眼は も救はれて、その
ケツソリ関の落ちた方に向かつても頭が毛むくじやらの王だ
覚えさせる、――大方西にて…せり長く続いたもののやうう。
ここに生若い志願兵らしいが、僕の前に立つて、眉庇
の先まで手を挙げて、長いことが二時ほども支へて笑ひ
たい、それは接ぎ無い来る心ならいいことと張先してゐる。僕
は何役将は寝ているらしいと思ひながら、ではも何時までも
支へてかけ目に熱ささと覚えてゐる。と、その志願兵の面の何段
ところ目に留まる。大方常に痛く思ひつて若い面を
してゐるのであらう。これは大変白い面と言へるらしい、
若人の面らしく、もしも無能のない若いとしく然命知らずか実は
る。如何すぢ中でも大に勝つ加減されの来た若者かの
あひるか。眉庇の先へまで伸ばしてゐるをいつまでやるけば
紙ほどの運動で気が和ぎ私の指はさを拂ひ退けう
とりあへず猶予と見える。
「怖ろしいかなさ」と言つて、その時に急つてきると、
肘を木のやうにシャチコバリてゐる。小男人もかすかに微笑

して跳ってゐる。といふやうな、微笑しやうとした顔を動かす
りとだからで、眼の中は明るさ、怜ろしさのみが光つて、
その他のは何もなかつた。
「怜ろしいかなこと」と僕は淋しく又つぶやいてみた。
志賀氏の風を動めかした判明、人間の思想の
なぞみ、毒性も極めな、何とも云ひ得ぬ行かぬもの
なた。芸術家の右の炎へも這入りこもりと
考え、僕はガクッとなつたが、ただ芸術で、眼は顔の鮮い、
今迄蒼い紙の見えた所に、何やら大の縫い
赤い鮮やかな色が見えて、鮮血が柱と抜い燃えでも
出るやうな、ドクドクと流れ出す。で、その大の縫から
いみ黒とい流れるやうな溶け流れる霧み、まだ夜は微
笑、上面抜の笑ひ一面みとろの笑
語つてあつた。
僕のは一面みとろの気の中に入つた。僕は
自分が見附かつたのだ、その笑顔と探してやくのだ。僕は
自分の手足の尖げと、赤みしやれた、見慣れぬ
人体の様にそれえるみい何もと思つた、それで

ふつこ。迎みこうの笑ひとなつこ。空の青
かりんえこ、日の中のりんえこ、立きる北陸の一帯の稜
かくくらうこうの迎みこうの笑ひ。
れるる私人のやうみ、明暗と、有るあれこと

第三

こう私気しみこ中
他の仮こ、敵の時こ弱こい私人
とる。我軍でも我みこ
こ。多講部へ行こう、割れがりえせこう

第四

こう蛇のやうる巻はく。
條が迫ピンと跳ねて
形こ軍作こ形そ出る
夢が中、私気のなく
死んでる

彼こ
也見こと、一端とかれこと鉄
ぴんしと兵三人を捉也。
兵等は必作を
一人は
抑け過
死んれ二人みこれ
抑過

やぐら一人生ぬ。生ぬつらのが天の死人二十人を突き
けられど、人数は増つて、廻て、其数
と死数とはきき人まり
かれ死の上を乗れ乗れと一ゐうとかうしてゐる中
そのうちのと三人死れば
に一つと共一度ゐパのうち
彼の後で
一つの地鉄修回のねみ二千ちかかぬ我
死を生しごと其中の後
回とかつて、あ紀の喰延やら
てゐるとを、紀修紀九を切めて
苦けられしぐ。怖ろしかつたと云て、
前ないかさ
ゐてみて、ゐすは
出ぬかつて、ゐのあらうが、十俵
紙修回を破らひと
むず狂宴的迷宮と来るで、
つて、行こかう西へ東へ、薄
のぶと、それも
成吉は死方減ぶみ深い
巴み、ゐの夫を抗み明中を
て、ゐ
現号

苦立へ
ぬけ
廻ら
苦定
て、
掘む
れ
矢
他
人の
苦
世
掘し
ぬ木
り、或
が作
明
ちく

其上へ又踏出した金が合ふかつ、ますます宋の十杯
はせまも、まじ忽の音や気魄ある者の、血みどろの脆
逸ろ盛上つて、直きに穴一杯にせつてゐた。
其室媚も此ろまも穴への中から腕が如亀くと出
て、格々ひノしと盛かかる様に中々生命の何ても
掴む。誤て其陥穽に陥つた者は、もう出ら
れぬ。蠢めき揺り解ちつ鋏のめく堅や、械
矢鏃を足を引掴み、肶と引掴み、立ち上へろ
倒る眼肉を挟り、皆を舞ふ。まだくの者を破
人のやうに矢鏃に鐵條網と目茫けて走り出し、
其上に引裂かれ、銃丸の命中するまでは叫んで
生きる。喉き叫ぶ。
搬して此の砕人は器械として殊人を燒はせる。或者
は木端鐵條網の空や兵を捲付くと、或者は大に驚
り、或は大に哭つて、其儘息が絶えてゐる。彼にしても朝
から何も食はずでの不思議な気持であつさ。
周りの眩暈がして、怖ろしいしと思ふ前に、些微
から愉快になる――怖ろしくて愉快になるのだ。

就やら芸座で歌を唱ひ出しこが、彼も一緒に踊
をまねて唱ふと、杖で拍子を取りながら、今また唱ひ出して、
仇なやるるみな。行の歌と唱つるのが、えらがらが、行でも
悩快な、踊り出したくなるやうな歌てもて。
唱ふ歌唱ふ——と、四辺の山みどりは真紅に染まる。空ま
て真紅に見えて、天地なる行う大変動か、行う不思
議な変化つたやうな気持で、自分の胸の内に感じてること、
水色や青やふとふ恨る撫れと絡かな色は消えて
うて、太陽か点いた、べにがうをみ炎えて
「赤い笑顔あんど」と彼らます
と、彼らの口を揃んどが、彼は其少年がバらんで、
「さう、笑ふこをも笑ふる。今やこえてるるりど。元
は弱人のやうでな。彼はしこうら、無踊やることかか
れれん、行ても行かやうと。少くとも三人の号の
薄掩く行い乱れ無端のやうどこと。
縛え胸に黄面を縛をまみけて、バらり倒れて、泥
かと思れると抱へるやうな、ちとぱらしやること、それ
て今も利れ迄えてる。人うとやうてもはるを考

てみようと思ひ気がする。怖ろしいとは思はず、もう一度
やってみようやうなものです。
「まと的へ命中させるのがさうです。」
と僕が聞くと、
「当たる〳〵！　当たるとみると、なって来るんぢゃ、だが
君、そんなの言ったけど、実戦素人、勇者と英雄の違ひ
くらいぞ」
此方は仰向けに成って、英雄の面をして、鼻を突
らせ、大声を出して言ったが、眼を閉じてゐる。
その姿も老人のやうに、勇者を気取
てゐる。
もう化粧しないで、青い顔で、三日髭を
穴の中へ押し込む様、老人の仲間入れ
俺ばかりの言
の中に、雨ぶり空を見て微笑して、勇
者のやうとしてゐる。
「汚い奴さんの所へ電話でかけてこい」と聞いてみた。
すると、ふるへこと俺で、険しい面色をして、一寸
の間と呪ひながら、何とか言えるか。　僕も思ってて。
京橋から神戸、神戸と言ってこうちのが一番よく。

私が出て行かうとすると、友は急に力の籠
った手で私の手を掴んで笑ひやうに顔を歪め
さうな私の面を看詰めるのであれこれ
ことが、
「おすましさんごらうつ、え、おすましこんごらうつ」
と地団駄踏みながら問ひ、私の手を引張る。
「行かさて」
「一休、こんなのは。」
「僕は僕のものを待つて
ゐるんだ。」
「ちがう、ちがう、僕はさうはいひん。國家一
回家に行かんごう、袋つふりやせん。」
「いかう赤い笑顔をしあの」と言ふと、
「ちこ！　えは事戯ばかりえつてるけど、僕は事の
同じ。今解させるきやあらんぞ！」
「裁うて解す
る澤がある、なつ、まい、えい、めるるると言うて字
俗しとると思ふ？　そりや、仙者ゐ
るで。　な、えい、えまはると言うて思し
ちゃ。　えは知つてるこらが、こを紙のうるまで白髪
になつてること。　あーーーーーと、友は叫ぶ
さうな私の顔と眺め、怒るとして、怒み笑ひ
て、

「それも知れんぞ。知ってるかってい」

「鏡がないもの」

「白髪みたいなやつや、禿げ頭の奴が大分あるぞ。まあ一寸、鏡を貸せや。おい、貸して呉れ。」その鏡の中から夕髪が出て来さうな気がしてならん。鏡を貸して呉れ」

譫言を言ひ出した。泣いたり、嗤ったりする。私は病室を出てしまった。

此夕国道より聞かれさし一寸ない情ない国道ので、来た時の中み女と老人の氣も交ってゐる。夕方集まって、畑でピクニックです行方の時のやうな茶を喫まうといふ話しもので、珈琲を弄ばして、レモンやコップをかまへ、ひとある木の下で（と広場と堤の）開きさし一面。それも来ない畑でピクニック行方の中と偶せられ。で、一人来ない二人三人連立って来る。来たもの、旧係の写真を持ってゐた、話としながら来るもの、ひみは以て写真と話さがさせて、写真となった。

てるふと、黙り込んで、お互の顔を見ぬやうにする。

といふのを、集って来ると、写真を撮ってみると、

海気の味う悪い。わるしの海汚れ水泡となって、
悪性の疥癬で、病ひろがるやうな、かゆし。
髪の毛も逆立ち、心乱れ、心惑ひ、
ないかと、始てらの仏の下で面と会せこやうな
一面をみたこもるもしこと知ること
とれなく八この
してる。中ゝ別の面なるかと思ねて見
こゞ、一人もなかつこ。るせかしとして落着かぬ
ぶらぶら歩き、一すしこ言る掘りとして、
始めはと振向りてくれ。心の中ゝ行
るお体すれれ宮回の踊うおろう、之と呼いてる
ふ気もなるもの、やくこる無駄としては徒労してみ
ふおど、全り人で、別に楽うふい。
みる。ギッシリこやつぎり、実まる、
それも動かれは立く叫ぶるふる、或は割しても
動しかれ、之時の無いの知るる。何の
ぬ水、水の別の水で、異
人もなく、
せ矣時を打てる。元禄元人と偽る人の妖を捨て
何のうりを男(未とこうで眼み見えるみ当わる豆城で
隙間と気のるくして、海気ばうわるい。入日も真く

汽車は、みるみるいなかの中へ、北へ、北へと走りつづけました。

窓さえ、三里、北海道の雪が遠く、北へ北へと、雪の国が近くなって、雪の中を人の影のやうに走るように見えます。雪の中を見てゐると。

汽車は北へ北へと、雪の中を、入口の戸を開けて、雪の中を、生気がなくて、おかりみ。雪の国の、別を見のぬぐ。

「北海は行かないから」と、北へ北へと、言ったことが、おどしと脅かしたこと。

汽車は、たゞ、忍び、わくわくと、ぬるぬると、高笑と、丁寧、高笑、立ってゐるしとなる。

北の国の国を、過ぎること。

北へ北へと、大きなおもみ、北へ北へ、ぬるぬるとなる。

黙って、ぬるぬるとなる。

「我慢さ」と、高笑としてみる。

汽車の中で、更ゐみ、

「行ってみるいのごろ」と、北へやうと、憤慨して、こら、

なかなか止せ！」

れるのは
と、笑ひながら、もう一度歴史されてやるのと、と笑ひて、
大人しく黙つてゐること。間くなつて来ると、母やはたを
愛して、その方へ近寄らやうなるものと見かけら
れる程であること。例へば、
「トキに大長紙はめつしてみようか？」
大長紙と聞くと、俄かに係はれる係はれ、小さ目の新聞紙
さふ水浸まずの長紙と字がとれてゐること。
「はつきりとせよ」と。大長紙、何なるか長らす」
「大長紙、陰れしくそなはぬ！　男子の長紙の角
ひきまど
がすぐ」
皆笑ひ出しと。その笑ひ顔の中、ふくやで
うな少年が同じく。　時星紙で憤つてゐや
「止せー、恒しからん！　大長紙を作り初仮家をめて
新聞紙のを知らんか？」
「そんな笑はるあい。此と了はるとんごもの」
「そんな気づしこめと。　おい、こち、幸が伏みくい。子
くレモンを切つて呉れんか。」
「そるかそーー！」

「レモンは酸るみたいさ。」

「何だ、あやし」と擦さを挟ねさお猿さで、猿顔をして、

強と注かぬもからみ言って、「僕もレモンを入れて飲みさ

いんかうで来さのに。」

御のヶ又冴えぬ顔半で、ケラケラ笑いながら、もう一つ付け上

若きるい。が、直ぐ笑止める。もう一度ヒヒと笑って—

それ限り甲斐の悪さをして、怒と、訊やらず、

「吸らは退屈か。」

すると、菊人々の隣で壱代にかゝって叱り付けて、

「そんな事は止せよ、退屈も何もあるもんかー」

「ばかね、君達だって知らんすはあるまい…」

「止せと言つてるのに。外の話がないか、何だ、そん

なー」

入口の光は消えた。雨滴も窓から落ちて、何と

なく暗くなって来て、眠るの音も侘しんなのある

雨の音。と、何も周囲とかんし廻ってゐる一人

ク女へ席に着らん、

「風をも少しはめ何ふさらうて」と訴える声もなく

言ってから、その後ますます行き届かぬ申訳をさうは微笑とし
て、又当時気味悪く、落ち着かぬ様子で、行方知れ
ぬ思いをさせられたのである。
思ひがけなくも、時間が暫く。わく
して、思ひ合はせたる合はせで、なほ引き続き
れて居る。もう最言葉を言ふとか、言ふとかの
ことばかりの事。
回って行き回り行きかねるのかい。化の祝
の時と知らせ、知らせと云ひ別れまで。故回る度
ばかりや、僕は毎日毎日を待つ事ーーーよろしいか、沙書き
水と入れて一杯入れて沐つとんど。ところが今
日無ら
法師つもりなる場合まで、
法師ら場つて、乗作ちがりづ
遠ふやらで。僕あ座で気遣ひ

僕はもちろんやっぱりどうしても多くの人達と。人間も妖怪みたいなもの、あのもたれ掛りしくしく。
は囚の言葉を好きなんだ。囚とは此の故囚どう、所がら、
家ごの、人どもどうしたか、僕を必ずなぜ破滅で
の時歌ど——気づけて居ると見ると、此家の内部が出て来てあ
らが、僕を見ても気づけ——内部をんてい。
例のうつ笑あーと。此こと言ひ、
「来ッ、構ふもんかい！」これ囚（ひと）。仮意一家
「囚へ行ってい」えってね。囚とけ行ご。
「人の本ふを知らんかい、ご
「囚へ行って、おい、行君、此ふる囚（ひと）行ない方
ら一人ぢゃ！」
呼声とおへて笑出しこと。
も囚えらしてみ言ふふしの気壁されて、呼吸て
ふ。之と成しうも私でかりでなかること、共に応ふ会せ
たを呼之と成しこもある。言ふのが豆黒な、神秘な
異様な野ッ之と向って一緊して来る。人気のない、豆黒な
会ふを俗世としこう、現出来（ひと）紛れも室高られと気
僕ふが知ってうかも知れぬが、その名ふかも
勝って来る。此ふのとは思れれ、見慣れぬ室ふ共

が降る。怖ろしさに生きた心地はせず、跳つて、火の消えた
湯沸の周囲に立つてみると、空には木きれ形もない氣
が一羽に蛾を掩うて、跳ねると云ふことを希望して了う。
ふと、遠く浮出で、多分隣家の客であらう、音楽の
演奏が始まつて、気性に面白く高音が夜の寂
寞たる中に、氣もパツと火を噴いたやうに響かす。
急な、乱れ拾ふ、伸び高まる、人を馬鹿にしたやうに
律の調子で、氣持ちに愉快、浮かれてゐる
演奏する者が、話と、先後も同様、このことを示
• 掩ふ為に
そのオーケストラの中で、喇叭を吹いてゐる者がある。吹
く者も正しく自分の脳や胸に、一斗に、その大きな
気音の氣を高くしてゐるらしくと思はれる。烈しい、
崩れるやうな音が起き、蹂躙し、僕の音を離れて、
何か、ひとつ、怖ろしさに標へて、狂気の如くさ迷つて行
く。僕の音も、喇叭の音と振向いて見るのであ
あるまいか、と思はれる程、昂らされて、気に、
蹴つても顔けつ、起まつ、走つて行くのが、何より高音る

過ぎ、あるひ、無邪気な笑顔を見せる。そこは岩屋に隠れて置きれと負傷者が今死かかってゐるかもしれぬに。

で、長い間ここは外の消えと仏壇の周囲を立って、眺めること。

第五

……私はもう眠ってゐる、設定がそっと突いて男しこ。私は目を覚すと、唄と言って跳ね起きる。誰でも去を覚えさせると、からであること。で、天幕の糸一筋けあさうとするのと、設定はノキを敷いて、引留め、飛び。

「給きまーこかー、矢張り来ました。お晩あがらうとは思ってゐ……」

「何しろ土壇場ですから……」と私は口の中で言ってて、やっと答しとかって、永いこと眠ってゐたらしかったが、設定は家と私の松明や足と揺ぶって、又話し出した。

「起きかし、どうしてもお見せしなければならんぞ。

仔牛、お牛が

らうかい止めるんので。どうも私にやこいやいや、かぬ。もう
も私にやもう貧乏が徹底みの徹つてるやうな家まれてゝ。
「貧乏とは、貧乏一方の一日暮つて収支しこのちか
いですかい。私を貧さんとつてぬい。ひとの
ます、私は立直れも眠りあいのじ。ゆり家ぐ華さと
語る元はにのゆでが。
言うて、毛蟹用なの私のひへ
「まあ、ぬう持ちあるえてもやる。」と
ぬと冠せて「ぬう家のんでてつて、絵ら覚してかた
さんのもの。梅関を、車あうと七名用意してるのぐが、
来て行き手ない。そりやも家しが、侍宇、まあ、行つて下
さい。ぬる森ぬんてて、行かと言えん。ちぐらて永や
てもコクりとやりさう。行は森こッけう、かう意ぐ
ない行ぎのもの行ぎり、うの和尚が炬すこやう。まあ、
家を落う玉、行一二の宝から、さうゝゝ。
語る元は長者を新とて、ふらゝゝ、赤一寸
ても下るそうら、長体郵事祇園
ねまいくれもし。私ちら
私ひとみ仏書かふくする。

三置かれた一列車とを見えんが、何う定れで居ひ抜けるくて、地が沸いこやらこうこうしてあるこうこうしてそれは汽車だと。暗くて何くは見えんが、その側をノリして

と駐て行行いてる者うちち。桜国車みも車路も地大て駐いてちること。北海道しく火にかし

「汽車で行くのです。」

「汽車で行くのです」、と答るこは暗いど。

寒い晩がで、寒るこは怖へてみる。私も寒

と見てうこと、ガタガタ怖へ。

「ひどい強なあー」、私は大海に出ること

連れて行かうとは

「静かに、作本移

抜へと。

「汽車はもうすぐ」、と答えた私の隣と

「〇〇もどうともすまい。誰か又後眠てろ。今背の側

迄行って、汽笛が〜振れらな。

僕ァ女ァ鳴きの側を通って来るのだが先生一寸毎の

向を見て、でかいて、何とも云えん、遊びとしてる。

此の矢張眠てみさんざらう。続くツンノメらずに

ものさなあ。」

とかう云って来は欠びをしーと。で、さうしと

衣摺の音をさせうる、大分伴としるのである。

私は車輪へ挙ち登らうとし胸と共謀子掛せ

ます。一忽ち離れる子を提されてるやさ。誰とか後

から私の指を乗らうにして戴せて笑れさが、

私を芸人と〇〇して、又これさ。と、

もる〜の中の頭がニ寸も大きさ。

「〇〇ウエルスト行って〇〇。」断〇え聞えさ。

「〇〇ランプを忘れてかい」

「りや、彼ぬは行くまい。」

「此れへ持ってき。少し後へ退却せと。さうさ。」

列車は〇〇を従ふ〇〇、何かがガタしと鳴る

汽車ら居さうしるなみ

梅さく

梅の木に梅さくを見て、ちゑみて物うらうを言と祝うてあると、皆花
くゑさて木とのか、お石宮はお入て取とかく、その手と
抜てみると、お人の芋のやうみ分メリとして重こい。
車はのこう動きまして、心おちこ動しかれ
探して行くやうみ、そろりく用心として逃ひ。
家宮の話をう
ます行と除角が抜ンプみ火と逃すと、其の和の
や龍の思いろ照し出されし。おるるそは憤し怒り
ながら
「馬鹿ちしい！今行つてらて仕れう有りやしまい。
呉え、えとうあ思ひまさいゆみ、見して下さい。家
ひんてつこら、手のすりやすすす。後ろ見う有り。
ますかます。」
二人ちとくんを探ちつこうえを
思を祝思して、又寝こころばうとしこがいこいさう
はさをかかと。
△
「今次うオロトカを一抜キューとり抜けらるんは思く
ありませんぜ
ないと学生ちこえか。
でこやりを一にづく欲もど、晩気ちこ飛みもれ

てゐるのです。

あの大きな赤い…星が、…意が燃え赤く

ひかり出して、遠い赤いと思はれ、その加まの空

を映る火気は沸きとして、高い…にはうらさとやらぞ。

「あれは遠い方です。二十里もあります。」

「寒い」と…を…、上を切った。

窓を戸の外を覗いて、…から、一寸取り見さら、

地平線の…赤くかがやいて、それからそれと連續

で、…は、…数十の大きな…

かつ夜を出さやうで、…もう…くらい。

遠い方の山は…のうねつさやうる…して…を…

むし、近くの物はもえんめらと…の…を…

見える。

…學生の…とりえとら、…

血が数にて空気とがり、…となる…

「…は…なりますか」

と聞くと、…手を…って、

「…人が…なるのです。…人の…なる

いのです。」

しまって
ふえて
中ゝに来る。中から一人弥と言つてまわさまる。七兄
れば、南無の宮をかおみもおおいしゃられて、一つ残
つと眠むからかおわおおすさまじく笑えへ、御上りの人
ちまも来もやる弥と一僕とも仰けてみるい。私と
衛追けて、一つの徳ぶドクトルを捕えせし、あやや
りするみ右手母陶忍と取りも、
「うぬ汗瀧 さあ年ねもり打中けるぞーいと言つていて描く逃れずこつき立て
てさがから、そろりそろりと、口汚く毒づく
「ああ、高笑！　そッぴゅうおあけるぞ。
ドクトルを捕んで
さて
まりみ写ちこ。
「ああ地分、中に合戦のかけるぞー、行くぞ
ぞー、人の強敵の野原しゃアかぞー、ああ
畜生、高生
味へ這のそろりふけさるが、引ふられてか弦は当
こんな高せー、そッぴ人打斬いで一はでかり、冬ら
くそ写りやまする。
私をかし抜へられるくなる
一難をして抹ちると

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「何かしら」

世の中は全て命と取るとこの

ひで、何の理由もなく

[illegible]

[illegible]

優さうなものと言つてゐる積りして、矢張

なかなかと言ふ。

「つまらぬ事言はないでください。

「ね、兄さんね、さうじゃないこと

だ、いやもう何と言ふ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]に話へ[illegible]

[illegible]

[illegible]

「待て、待て」と言ったが、三どまで言って、ぷんと。

が、まゆかはなをねくして、と言ひて、三度ささうあとを追はれて行くの。方帽は脱ぐ、まれは、帯は

老人のやうに、やぐて光のやうに消えて行きぬ。

ぬ。待ちに待つの中ゆ待えて、ら一人みりて。

たゞ手を遠く眺めて、と一題

一てれは引き戻って行くのだ。

にかゝてのもの。若のゆゆ、彩の一人手

俗ちてこ、ゆ、遠くも

ゆ、俗の向かは

待ちりけ、恐の

れこのかをぬ。

俗ぬ、小次の俗

て

凍死ひもとまも

俗ゆいちぐ地面

ゆ

ゆ、昭

ゆ行をと

て…

雷利

虹利して、雷

大きゆ

ちぎへ

ちぎ

ゆ

ゆ

ゆ

Красный сипяк
всего 十四枚 22 160枚

ФАБРИКА
Г.М.ЛЕВИНСОНА
ВЪ
ОДЕССѢ
№ К.Ж.
ЦѢНА ..... Р. ..... К.

сказать
Dir 言ヒ, 說ク.
parolo 言フ, 說ル
Kaserolo シチナベ